

Title	鳥と鳥居
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 10 p.85-p.108
Issue Date	1994-03-18
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79623
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

鳥 と 鳥 居

井 本 英 一

The Origin of the Torii

Eiichi IMOTO

古くから、境には、柱を1本あるいは2本立てる習慣があった。3本以上の柱を立てる場合もあった。1本の場合は、天と地といったような、垂直性を表象するが、2本になると、垂直表象が2倍になるのではなく、聖と俗の境という、水平性を表象することが多い。

2本柱は、聖と俗の境界の通路の左右に置くと安定する。それは、陰と陽、男と女、生と死といった二元論を表象する。本来は、2本の柱は独立したものであったが、時がたつと共に、その間に、笠木や横木が渡されたり、綱が張られたりした。それらは、一方では鳥居のような門となり、他方ではさらに発展して、巨大な楼門となった。中国では、同一の構内に、各種の「門」が見られる。この場合、その起源は、ほとんど全く忘れられたかのように見える。宮殿の通路や街路上、あるいは、海外の中国人街の入口には、鳥居形の門が立っている。屋根のついたものを牌楼といい、屋根のないものを牌坊という。明代には、紫禁城の正門の承天門（天安門）の前に、牌楼が立っていた。承天門には、まん中に天子が通る大きい門が通じ、左右に2つずつ、皇族と三品以上の官人が通る小さい門が通じていた。牌楼は、いわば鳥居のようなもので、まん中の牌楼は高く、左右に2つずつ牌楼が連なっていたが、順次低くなっていた。同じ構造のものが、奈良県桜井市にある大神神社の三輪鳥居に見られる。大神神社は、日本最古の神社の1つとされるので、その鳥居の形式も古いと考えられる。三輪鳥居は、中央には門扉を閉じた高い鳥居があり、左右に、それより低い、門扉をつけた鳥居が1つずつ連なる。三輪鳥居の奥には神殿はなく、ご神体の三輪山がある。中国の牌楼の後には、山のように巨大な承天門があった。三輪鳥居は三光つまり、日・月・星の鳥居といわれたが、中国の牌楼は、皇帝・皇族・貴族の門であった。この場合も、宇宙論的に見れば、日・月・星を象徴したものであった。

牌楼の前には、人工の堀である外金水河が流れ、5つの牌楼に向かって、5つの石橋が架かっている。紫禁城内の太和門の前には、内金水河が流れ、5つの石橋が架かっていて、同じ構造になっている。外金水河の外側には、左右に華表が立ち、傍らに唐獅子が安置してある。この華表は白玉の円柱で、先端には、獅子に似た獣の石像がうずくまっている。この獣は、皇帝が外遊の

ときの行為を監視していると伝えられている（金受申著・村松一弥訳『北京の伝説』平凡社、1976年、220—226頁）。

華表の柱頂には、石獣がいるが、柱の上部において、左右に翼状のものが広げられている。この柱は、単なる装飾柱でなく、獣や鳥の精霊を内蔵した柱であつたらしい。金水河は、単なる区切りの堀ではなかった。堀は護城河と呼ばれるが、現実には、形式的な水路で、日本の城を取り巻く堀のようなものではない。この水路に架かる内外の金水橋は、聖界と俗界を隔てる通路で、金水河も、境界の1つであつた。華表、唐獅子、水路、牌楼、楼門は、全てが一体になった境界の表象であつた。

京都の太秦に、^{このしまにますあまてるみたま}木嶋坐天照御魂神社がある。現在、神社の境内は、その西にある広隆寺とは200メートルほど離れていて、人家がその間を埋めているが、かつては、広隆寺の寺域に入っていたらしい。この神社は、京都では最古の神社で、『続日本紀』大宝元年（701）夏4月3日の紀に出る。それによると、山城の月読神、樺井神、木嶋神、波都賀志神らの神稲については、今後、中臣氏に給付せよとある。木嶋神社の鳥居は、湧水でできた浅い池の上に、二等辺三角形の頂点に3本の石柱が立ち、笠木と貫と額を上に取り付けた特殊なものである。3本の石柱のうち、1本は後ろに位置する。鳥居は、元来は2本柱から成っていて、その間に神格が存在すると考えられたのであろう。この神格は、時代と共に、その位置が奥の方に後退し、神殿に鎮座するようになったと思われるが、この3本鳥居では、主神格はまだ、2本の鳥居の間に鎮座する。この1柱の神が主神で、左右の2柱の神は、主神の陰陽の属性のように思える。余分の湧水は、水流となって境内の外に流出するので、水面は一定の高さを保っている。3本の柱に囲まれた空間には、円錐状に積まれた石が水面上に姿を出し、そこに浄木が1本立てられている。浄木には四手が懸けられる。それは御幣そのものである。みてぐらと見れば、それは、神の依り代としての「くら」となる。梅原猛の解釈によると、御幣は、アイヌのイナウやけずりかけと同類のもので、鳥を表し、羽、口、耳がある（『日本冒険』1、角川書店、1988年、83—103頁、「火を操る人たち」『東アジアの古代文化』70号、大和書房、1992年、12頁、『森の思想が人類を救う』41—42頁、『日本人の魂』63—64頁）。木嶋神社にも、紫禁城の天安門に見られる表象が、形を代えて表れている。紫禁城の場合、南北を貫く正中線は、天子だけが通ることのできる道であつた。中央の牌楼のまん中を正中線が通るが、1本の柱はない。しかし、天子自体が1本の柱であつたのだ。伊勢神宮においては、内宮と外宮それぞれの正殿の床下に、^{しんのみはしら}心御柱が地中に突き刺され、周囲に800枚のかわらけが積まれる。心御柱は、神明鳥居とは離れているが、本来は、それが、中央の柱であつたと考えられる。内宮の別宮である^{いざわのみや}伊雑宮で行われる御田植祭では、太一と書かれた大団扇をつけた、長大な笹葉つきの青竹が立てられる。この柱は神明鳥居の中心に位置するように、田を隔てて立てられる。この青竹の柱は、田の中に倒され、参詣の大勢の舟子らが、裸体で泥田の中に入り、太一の帆をつけた紙の船形を八つ裂きにして奪い合う。笹葉や青竹も寸断され、舟人らは、自分の船の船霊に祀りをこめる。そのあと、田植えが始まる（岩田貞雄「伊雑宮」『日

本の神々』6、白水社、1986年）。太一神は、道教的名前をもつが、天照大神の別の姿であろう。2本の柱から成る神明鳥居のまん中に位置する太一神は、エジプトのオシリス、ギリシアのディオニュソス（ローマのバックス）と同じように、再生に際して、その身を八つ裂きにされたことが分かる。神を八つ裂きにする神話は、世界に広く見られる。芋を増殖させるとき、芽の出る部分をつけた細片に寸断したり、1つの果実から種子を手に入れるために、果実を裂く行為と関係があると考えられる。あるいは、現代の魚類の人工養殖では、魚の卵巣を裂いて、有精卵にして稚魚を孵化する。神を八つ裂きにするのは、古代の穀霊信仰にもとづくものであった。

太秦の木嶋神社は、中臣氏の管掌する所となったが、中臣氏は、神と人の間を取りもつ祝で、はふりは羽振りのことであった（大和岩雄「石上神宮とワニ氏・物部氏—古代氏族と神社（一）—」『東アジアの古代文化』55号、大和書房、1988年、148—179頁）。神社には、鳥獣の具体的な形象は見られないが、鳥の姿が隠れていることは確かである。木嶋神社の三つ鳥居の中央の柱が主神格であるが、それは、円錐形の積み石に立てられた浄木と同じものであった。発生的には、2本の柱の間に、祭壇としての石積みがつくられ、その上に、祭神を象徴する浄木が立てられたのである。

イザナギノミコトとイザナミノミコトは、天つ神から天の沼矛^{あめ ぬぼこ}を授けられた。そこで2神は天の浮橋に立って、矛を下ろして海面をかきまわして引き上げると、矛の先から塩がしたたり落ち、それが積もってオノゴロ島となった。2神は島に天降り、天の御柱を立て、神殿をつくった。この神話には、木嶋神社の世界が反映している。塩が積み重なってできた島と円錐形の石積みは同じものであり、天の御柱と浄木は同じである。2柱の神は、鳥居の左右の柱にあたる。まん中の主神格の柱、あるいは浄木は、どの神を表すのであろうか。イザナミノミコトは、ヒルコとアワシマを生んだが、御子の数に入れなかった。2神はその後、淡路島以下の国生みをし、さらに神生みをした。『古事記』によると、2神は、神話の舞台からは当時、すでに退場してしまった10神を生んだが、そのうちの2神が8神を生んだ。2神はさらに、風の神、木の神、山の神、野の神の4神を生んだが、山の神と野の神が8神を生んだ。次に2神は、天鳥船^{あめのとりふね}とオオゲツヒメノ神とヒノカグツチノ神を生んだ。イザナミノミコトは、ヒノカグツチノ神を生んだとき、陰部が焼けて病の床に臥した（上巻）。2神が最初に生んだのは、古い段階では風の神であり、新しい段階では天鳥船である。このことは記憶するに値する。

大阪の長柄川には、現在はコンクリートの橋が架かっているが、この橋には、淀川や宇治川の橋姫と同じような橋姫の伝説がある。齊明天皇の御代、長柄橋が架けられたとき、人々は、人柱を立てようと相談していた。そのとき、膝の破れを白い布ぎれで縫いつけた、浅黄の袴をはいた男が、幼児を背負った妻といっしょに、辺りで休んでいた。そこへ、近くの野原から雉の鳴き声がしたので、人々は雉を射殺してしまった。男は「雉も鳴き声さえあげなければ、打たれることはなかったのに」とつぶやいた。男はさらに、自分の袴を妻が白い布ぎれで繕ってくれたのにも気がつかず、「膝の破れを白い布ぎれで繕った、浅黄の袴をはいた男を人柱に立てれば、架橋は

成功するだろう」と話した。そこで、人々は男をつかまえて橋柱に立て、妻も同じように立てられた（「橋姫明神の事」『神道集』貴志正造訳、平凡社、1967年）。有名なことわざ「雉も鳴かずに打たれまい」の出典の1つであるが、夫婦とその子3人が人柱になり、雉も殺されるのを見ると、古代の人柱儀礼の名残を留めているようである。架橋工事に際して、川の中数か所に乱石を積んで基礎をつくったが、その中の定礎に柱を2本ないし3本立て、雉を殺して供犠し、同時に人柱を柱の前に立て、川に沈める儀礼があったことが推察される。この橋姫明神に出る子供は、母子神の子にあたり、アドニスやアッティスやオシリスやさらには幼児イエスに相当する、幼くして死ぬ運命にある神の子である。この場合、母が橋姫として、主神の観があるが、死んで再生する子供が古くは主神であったと考えられる。この伝説の根底には、太秦の木嶋神社の三つ鳥居、泉水、石積み、浄木と同じ構造がある。2本の柱は、イザナギノミコト、イザナミノミコトであり、この夫婦である。2神あるいは2人の生んだ子が、死んでは生まれ変わる童形神であった。

古代エジプトでは、天地創造の際、まず混沌たる水の中から、原始の丘が現れたと信じられていた。その丘と関係づけられたベンベンという石があり、それを連想させるベン鳥という鳥がいた。その鳥は、本来サギであったが、後にフェニックス（ヘロドトス『歴史』2.73）となった。丘の象形記号は階段ピラミッドのように見えるので、後の階段ピラミッドや、それに由来する真のピラミッドは、原始の丘の表現であろう。同様に、ピラミッドテキストにあるベンベン石の象形記号は尖塔で、いくらか円錐形をしていたので、ベンベン石が、柱や円柱の頂き高く置かれていたと推測できる。オベリスクの場合、柱上にピラミッド型の石を載せ、しばしば銅や金で被覆されており、語源的にベンベンと関連のある名称で呼ばれていた。そのぴかぴかした頂部から、太陽光線を反射するようになっていた（ジャック・フィネガン著・三笠宮崇仁訳『考古学から見た古代オリエント史』岩波書店、1983年、224―225頁）。原始の丘は、日本神話のオノゴロ島にあたる。原始の丘の象形記号は、階段ピラミッドのようなものであったというのは、石積みであったことを表している。ベンベン石は積み石ではないが、先の尖った円錐状の石であった。。ベン鳥という鳥は、この石と関係があったらしい。石は柱上に置かれたので、もっと古くは、鳥が柱上にいると認識されることもあったであろう。ベンベン石が載った柱は1本で、その左右に2本の柱の存在が想定される。2本の柱は、恐らくは門柱で、ファラオの陰の身と陽の身を象徴したのであろう。それは、陰陽であると同時に、雌雄であり、生死であった。ファラオは、エジプト語では、偉大なる家、偉大なる門を表すので、日本語のお館さま、みかどと同じ考え方に立つ表現であった。オベリスクは、両側にファラオの座像が立つ大門を入った中庭に立つので、3本柱の構造になる。

三輪山の三つ鳥居は、構造上から見ると、柱を4本立て、3間にし、3間全てに門扉をつけている。『廣文庫』第14冊が引く『類聚名物考』巻1には、これと同じ鳥居が、江戸護国寺の観音堂の裏にある鎮守の社にあるが、扉はついていない。その理由は分からないとある（282頁）。この鳥居の場合は、個々の柱ではなく、柱と柱の間の空間が聖視された。三輪鳥居の場合も、柱を

拝んだのではなく、扉を拝んだのである。紫禁城前の牌楼には門扉がつかない。天安門（承天門）には、中央部には、天子が通った大きい通路と、その左右の、それより小さい皇族の通る通路があり、その左右の高官用の通路は、離れた位置にある。この場合も、三輪鳥居と同じ構造をとっている。本来は3間の牌楼であったのが、5間に拡大したと考えられる。

ここでは、3本柱でなく、4本柱に対する信仰が形成された。ことに、門扉がつかない場合は、中央の2本は高く、左右の2本は低いのが、はっきりと分かった。大2本、小2本の4本の柱は、2つの鳥居の柱を1か所に集めて、新しい空間をつくったとも考えられる。

諏訪大社には、上社（本宮・前宮）と下社（春宮・秋宮）のそれぞれの4隅に、7年ごとに柱を立て替える御柱祭がある。各社にそれぞれ、4本の柱を立てる意味は、私は、聖域の入口と出口につくった門に由来すると考える。これら16本の柱は、それぞれの4本が同一の高さではない。1の御柱は、長さ5丈5尺（16.6メートル）、2、3、4の御柱は、以下5尺（1.5メートル）ずつ短くなるといわれる（上田正昭他『御柱祭と諏訪大社』筑摩書房、1987年、11頁。三輪磐根『諏訪大社』学生社、1978年、139-166頁）。柱の高さが5尺ずつ低くなっているのは、中国の牌楼や三輪鳥居に用いられた柱が、左右に向かって低くなるのと同じである。陰陽の原理が原初の時代にあったと考えられる。御柱の根元には、石が積まれているので、オノゴロ島と天の御柱、原始の丘とベンベン石（柱）の複合体と同じものということができる。

スペインの聖地サンチャゴ・コンポステラに近づいた巡礼たちは、サンチャゴ市から2マイル離れた、木の茂った場所を流れる川で、身のけがれを洗い清め、衣服を着替えて準備した。川を離れて、巡礼たちは、歓びの山という急斜面の山の頂きを目指して、ほとんど走らんばかりに上がっていった。山頂からは、コンポステラが一望できた。山頂には、12世紀に建立された教会があり、石造の十字架と小石を積み上げた小山と、小石がたくさん積んである小山と4本の大きな石柱があり、そこでは、100日分の贖宥を手に入れることができた。山頂に一番乗りした者は、巡礼の王と呼ばれ、彼と彼の子孫は、ロワとカルロワと名乗ることが許された（P.バレ、J.N.ギュルガン著・五十嵐ミドリ訳『巡礼の道 星の道』平凡社、1986年、215-216頁）。積み石の上に立てられた十字架は、異教時代の積み石と、その上に立つ石柱の名残である。十字架の横木は、天安門前の華表のような、異教時代の翼であったかも知れない。ここでは、さらに、石積み立つ4本の柱があり、巡礼たちは、宥しを求める。山上にあるため、山下の川の流れとは、同一平面にないが、これらは全て一体となったもので、入口と出口を表す4本の柱、主神格を表わす1本の柱（十字架）、その下に湧く泉を象表する。京都の木嶋神社の鳥居は3本柱である点が異なるが、同じ世界を表象している。祭日に、神殿の敷居に走ってゆき、最初にそれに触れた者が、日本風にいえば、その年の年男になったり、福を授かるという風習は、広く見られる。兵庫県西宮神社の十日戎では、大門の前に待機した大勢の信者は、門が開かれると同時に、数十メートルの参道を走り、最初に拝殿に到着した者が福を授かる。

イスラム教徒は、太陰暦であるイスラム暦の12月に、アラビアのメッカに巡礼する。12月7日、

カアバを7回まわり、カアバの外縁にある、サファーとマルワという岩のこぶの間の通路を7回走って往復する。その夜、または翌朝、東に向かい、ミナーとムズダリファを経て、アラファートに達する。9日、このラフマ山に集まって、夕方まで佇立し、夕方にムズダリファに引き返し、小石を拾い、ミナーに向かう。ここには、第1の石、まん中の石、最後の石と呼ばれる立石がある。人々は、その中の第1の立石に、小石を7つ投げつける。メッカに巡礼した平島祥男によると（『メッカ・メディナ』世界の聖域5、講談社、1979年、90-91頁）、ミナーの大通りのまん中に、3本の石塔が聳え立ち、第2、第3の石塔にも順々に、小石7個ずつを投げつける。平島のカラー写真によると、石塔は、先がずんぐりした、人の丈の倍くらい、石柱で、首の所まで、人々の投げた小石で埋まっている。アラファートのラフマ山頂にある石柱は、頂部にピラミッド型の四角錐を載せた四角柱である。これらの石の形状や投石の行事などは、R. パートンや欧米研究者の記述に、多少の異同があるが、最新の情報に依った。メッカとアラファートの間は、涸れ川の川床になっているので、集中豪雨のときは、砂漠といっても洪水を引きおこす。ミナーにある3本の石柱は、東西に並んでいて（パートンの写真によれば、第3の石塔は、高さ8フィートばかりの、先端が将棋の駒のような石板であった）、アダム、イブラヒム、イスマイルを誘惑した悪魔とされ、投石も悪魔払いのためとされる。これは、イスラム化したあとの、異教の遺産の解釈で、本来は礫の山の上に立つ神柱であった。メッカ巡礼地にも、水の流れ、石積みの上に立つ、ピラミッドを載せた聖なる柱、そこへ向かう場所であるミナーにある3本柱（2本は入口の門柱としての、1本は主神格としての）があり、太秦の木嶋神社と同じ構造をしていることが分かる。メッカの場合、いちばん西側にあるカアバ神殿は、7フィートのへそ石（自然の岩磐であったり、石を積み上げてあったりする）の上に、30数フィートの4壁と天井を設けたものである。床には3本の柱が立って、天井を支えている。3柱は、2本の動脈と、1本の静脈を表すといわれる。3本の血管は、胎盤につながるへその緒の中の血管でもあるし、異教時代の2本の門柱と、1本の主神柱でもあった。周囲の壁と天井は、のちにつくられたと考えられる。カアバ神殿の屋根には、鳩が集まるが、いちども屋根を汚したことがないといわれる。マホメットは、イスラム教をはじめたとき、カアバ神殿の中に入り、異教時代の神体であった鳩の木偶を、壊して外に投げ棄たといわれている（G. E. フォン・グルーネボーム『イスラムの祭り』ロンドン、1976<1951>年、25頁）。異教時代、3本の柱に鳩が止まっていたことが想像できる。洪水のときは、カアバのへそ石も水に漬かるので、木嶋神社の三つ鳥居の省略化した構造が見られる。

カアバ神殿の場所は、現在は整備されて、原初のおもむきを留めないが、周辺には、イスラム教が認める、多くの預言者の墓があった。現在は、カアバの外壁の傍らに、アブラハムの妾ハガルと2人の間に生まれたイシュマエル（イスマイル）の墓がある。この母子神は、アラビア人の始祖とされる。かつては、各国から、巡礼と共にメッカに死体が運ばれ、この地に埋葬された。現在は埋葬の余地はないが、棺を担いで境内を通り、聖気に触れさせることは許されている。今から13年ほど前、イスラム暦1400年のメッカ巡礼の際、棺の内に多くの武器を隠して聖域内に入

り、メッカ襲撃事件が起きた。現在は、厳重に調べるので、同じ事件は起こらないが、棺の搬入はつづいている。死期の近づいた病人は、巡礼団に加わって、メッカで死ぬことを望む。集中豪雨で涸れ川が氾濫したとき、カアバ神殿の水溜まりには、死体が漂着する。原初的には、岩磐あるいは、積み石の上に3本柱が立った場所は、死者が赴く場所でもあった。イスラム学者は、カアバと、ミナー・ムズダリファ・アラファートは、別々の2大聖地であったのが、イスラム教によって、1つの聖地に組み込まれたとするが、岩磐に3本柱が立ったカアバは、アラファートのラフマ山に到る最初の門であったと自分は解釈する。ミナーの3本柱は、悪魔にされたが、この3本柱は第2の門であった。そこで、このメッカの聖地は、もともと1つの聖地であったといえる。古代メソポタモアの伝承では、イシュタル（イナンナ）女神は、自分の恋人であり、息子であるタンムズ（ドゥムジ）を冥界に訪ねるとき、7つの門を通過する。メッカ巡礼者は、ムズダリファで49の小石を集める。古くは、7つの柱に7個ずつ小石を投げたのかも知れない。また、7つの門は、7つの柱で象徴したのかも知れない。

バビロンで、もっとも人通りの多い門の上に、ニトクリス女王の棺があった。ダリウス大王がバビロンを支配したとき、王はこの棺を開けさせたが、女王の死骸だけが出て、何の財宝もなかった（ヘロドトス、1．187）。ニトクリス女王は、5代前のセミラミス女王に次ぐ2代目の女王であった。セミラミスの名は、古代人の言語観では、鳩ということばと関係があるとされた。アッシリア人は、昔から、鳩を女神としてきたので、女王を鳩と関連づけたのである（W．アイラーズ『ゼミラミス』ヴィーン、1971年、38－39頁）。2代目の女王ニトクリスの名は、鳩とは関係がない。しかし、鳩はイシュタル女神の聖鳥であったので、ニトクリス女王にとっても、鳩は聖鳥であった。バビロンの主門の上（恐らく楼門になっていたのであろう）に安置された（ヘロドトスは、門の上に懸っていたという）女王の棺には、ヘロドトスはいっていないが、鳩の木像を副えてあったとも考えられる。楼門自体が鳩の家になっていたと考える方が適切かも知れない。ダリウスは、この楼門を通るのを忌避したと、ヘロドトスは伝えている。昔、千利休は、己の木像を大徳寺山門の楼上に安置させたが、太閤がその下を通るわけにゆかないと、いいがかりが付き、利休像は一条戻り橋に棄てられて、いわば棄市された。楼上には、死体を棄てる習慣も古くあったし、首を曝した。門の敷居の下には、死体を埋める習慣があったので、門は、死者をあの世に送り出す、あの世の入口であった。

アッシリアの各家の入口の壁の上（鴨居）と敷居の下には、天の神ネルガルがいた。ネルガルは、冥府の女王エレシュキガルを訪ねてゆき、彼女と結婚する（後藤光一郎訳「ネルガルとエレシュキガル」杉勇・三笠宮崇仁編『古代オリエント集』筑摩書房、1978年）。ネルガルは、イシュタル女神の冥界下りと同じように、7つの門を通過して冥府に達する。天上のネルガル神は、鴨居や敷居に降下してくるときは、鳥の姿をしていたと考えられる。古代西アジアの宮殿や神殿の入口の門の左右に、有翼人面雄牛像が立っている。雄牛の胴は別にして、人面鳥を想像すればよい。

イスラム教徒は、犠牲祭の日、家の入口で羊を屠り、掌に血をたっぷりつけて、両方の門柱

とまぐさに塗る。ユダヤ教徒は、ユダヤ教暦1月（ニサン月）14日、つまり満月の夜、小羊を屠って、その血を両方の門柱とまぐさに塗る（「出エジプト記」第12章他）。イスラム教とユダヤ教は、外見上、似たようなことをするが、その意味については、独自の解釈をしている。いずれも、セム族の異教時代にさかのぼる習俗が、新しい教義の衣をまとって行われている。ユダヤ教やイスラム教の場合、犠牲を殺すのは、新年最初の満月の夜か、新年直前の満月の1週間前から4日間に限定されている。中国で、1年最後の月は、臘月といったが、王族が年末に狩猟した習慣から見て、臘と猟は関係のある文字であったことが分かる。冬至正月の名残として、冬至の前日に狩猟をする風習もあった。これらの場合、年の変わり目に殺される野獣は、衰退した人間に新鮮な力を与える祖先神であったと考えられるので、犠牲獣を殺すことも、神を殺すことであったことは、間違いなさそうである。門柱や鴨居に血を塗り、敷居を血で染めるのは、柱やまぐさや敷居の中にいる神、祖先、精霊を、年の変わり目に賦活することを意味した。

中国では、元日に門戸の上に鶏の画を貼るか、五色をちりばめた鶏形、あるいは土鶏を門戸の上に置いた。桃の板（古くは、日本の門松にあたる桃の板）を戸口につけ、戸口の両柱に門神の絵を貼った（宗懐著・守屋美都雄訳注、布目潮瀧他補訂『荆楚歳時記』平凡社、1978年、10頁）。訳者の注によると、それ以前は、鶏を磔して、門に吊るし、その血を門に塗った。さらに、『風俗通』には、村の入口の門には、犬を磔したとも記されている（前掲書、11-12頁）。かつては、正月1日を鶏となし、2日を犬となし、3日を羊となし、4日を豚となし、5日を牛となし、6日を馬となし、7日を人となし元日には鶏の絵を門に貼る。今、1日は鶏を殺さず、2日は犬を殺さず、3日は羊を殺さず、4日は豚を殺さず、…7日は刑を行わないのもこのためである。昔は、鶏を磔し、鬼を畏れしめたが、今は鶏を殺さない。どちらが正しいのか、知らない（前掲書、43頁）。これによると、元日から7日まで、その日にあたる鳥獣と人を順々に殺していったことが分かる。殺された鶏の精は犬に移り、犬を賦活する。殺された犬の精は羊に移り、羊を賦活する。かくして、7日に殺された人の精は、神を賦活するか、人あるいは穀霊を賦活したであろう。このような精の流れは、輪廻転生の1つの表れである。同時に、それらの殺害が門戸の場所で行われることに意味がある。さらに、ここでは、鳥獣と人間全てが殺害されるが、鳥である鶏が最初に殺されることを記憶しておきたい。これらの鳥獣と人間は、祖先神が変身して出現し、殺害されることによって、衰退した神や人間を賦活するのである。門柱には、神荼と鬱壘という門神の絵が左右に貼られた。鶏以下の動物や人間は、まぐさに磔されたか、吊り下げられたので、一見、供儀のように思えるが、神そのものであった。朝鮮では、男女の年齢が三災（厄年）にあたれば、3羽の鷹を描いて門楣に貼る（洪錫謨『東国歳時記』姜在彦訳注『朝鮮歳時記』平凡社、1971年、26頁）。門楣というのは、門の左右両柱とまぐさとも、単なるまぐさとも解される。前者の場合、3つの神格とも鳥で、同一の神ということになる。後者の場合、門の横木に、鳥が数羽止まることになるが、同類は多く見られる。厄年にあたる3年間、鳥の絵を門楣に描いて、門神やまぐさの神（アッシリアのネルガル神にあたる）から、活力を受けなければならなかった。

中国雲南省から、ミャンマー、ラオス、タイ北部にかけて居住するアカ族は、総人口10万人以上と推定される少数民族である。鳥越憲三郎『古代朝鮮と倭族』（中公新書、1992年）は、雲南省のアカ族の門について述べている。焼畑で陸稲の播種が始まる直前の4月吉日を選び、村人は、村の入口と出口に木造の門をつくる。門は、2本の柱の上に笠木を載せたもので、笠木の上には、木の鳥を数羽止まらせるが、数は一定していない。門には、竹のへぎを輪にして連ねた注連縄が掛けられ、竹のへぎでつくった鬼の目が、笠木や柱にいくつもつけられる。門柱の根元には、ヤダ・ミダと呼ばれる男女2体の祖先像が、自然木の股木を利用してつくられ、性器が彫られている（130－131頁）。前掲書130頁にあるアカ族の村の門の写真をみると、笠木を渡した2本柱でできた門が、約1メートル間隔で2基置かれている。日本の神社で、1の鳥居、2の鳥居という神門が、1か所に2つ置かれた観がある。諏訪神社の各社の御柱は4本ある。4本柱は、入口と出口の門柱の数であろう。それが様式化して、出口にも入口と同じように、2基の門を立てるようになったと思う。諏訪神社の御柱は、7年ごとに建替えるが、アカ族の門柱は、毎年建替える。アカ族の門は、彼らの年の初めとする4月に建替えられる。柱のそばに、男女の木像が置かれるのに注目しなければならない。メッカのカアバ神殿の構造は、地上7フィートのへそ石の上に、3本の柱が立ったものが古い形である。3本柱のいちばん入口に近い柱には、マリアとイエスの像が彫られていたと、アル・アズラキーが記録に残している。

昔、イエメンのジュルフ族のイサーフという男が、同じ部族のナーイラという女を愛していた。2人は、メッカに巡礼し、カアバ神殿の中に入ったところ、誰もいないことに気がついたので、2人は交わった。すると、2人とも石像に化してしまった。翌朝、人々は、2人が石になってしまったのを知り、それをカアバの外に置いた。はじめは、のちにマホメットを出したクライシュ族が崇拝したが、のちには、メッカに巡礼するアラブがみんなそうするようになった（イブソン・アル・カルビー著・池田修訳『偶像の書』深井晋司『西アジア史研究』東京大学出版会、1974年、171頁）。この伝説は、カアバ神殿が、イスラム教の聖地になる前の話で、異教時代の偶像崇拝の有様をよく伝えている。聖域の入口に3本柱が立ち、異教時代は、そのうちの2本の柱の根元に、人間の石像があったが、その由来について、上記のような話のできたものと考えられる。カアバ神殿の変転と共に、石像は男女神ではあっても、神殿内に祭るのをはばかれるようになり、神殿外に安置されたが、それでも、メッカの名家であるクライシュ族の崇拝を受けていた。異教時代の宗教では、2本の柱と、天の子イエスとマリアを彫んだ柱が、3本柱を形成していた。ナーイラは、マリアを、イサーフはイエスを表したのであろう。アカ族の場合は、村の入口と出口に立つ門柱の根元に、ヤダとミダという男女の祖先像がいるが、イサーフとナーイラ像は、これに対応する。カアバの3本柱にも、古くは鳩が集まったに違いない。この柱にそって、梯子が立てられた。側壁と屋根ができてからは、この10メートルほどの高さの梯子は上げ蓋を上げて、陸屋根に出られるようになっていた。梯子は、地と天を結ぶ、シャマン的な階段であった。

シベリアのヤクート族やドルガン族のシャマンにとっては、病人から悪霊をとり除き、消えた

魂を呼び戻すことが、重要な課題であった。シャマンは、天幕の外側に、枝を払った3本の木を1列に立てる。まん中は白樺で、両端は松である。白樺の先端には、殺したかもめをつけ、東側の松の先端には、馬の頭蓋骨を載せる。3番目の木には、何もつけない。かもめは、天の諸霊に捧げたいけにえであるといわれている。同じ場所で、別のシャマンが同じ儀式を行ったとき、3本の柱の先端には、鳥の木偶がついていた。西側の木のは神話的な双頭の鳥、まん中のは神話の鳥、東側のはからすである（ウノ・ハルヴァ著・田中克彦訳『シャマニズム』三省堂、1971年、482—485頁）。シベリアのシャマンの儀式では、3本の柱が立てられ、1本は、他の2本とは異なった木で、その木にだけ鳥をつける。あるいは、3本とも同一の木で、それぞれに鳥がついている。両方の形式とも古いと考えられるが、後者の場合、3本の柱のうち1本には、双頭の鳥がついている。シャマンの3本の柱は、いずれも、2本の柱と1本の柱の合体したものであることが分かる。2本柱が基本であった。前掲書はいう。アルタイ系の遊牧民は、シャマンの太鼓に描かれた絵によると、馬の剥ぎ皮を長い竿に挿し、竿を45度の傾斜で立てる。その前には、4脚の供物台、鳥の像を先端につけた2本の柱、2本の柱に紐を渡して、垂れ飾りをつけたものが見られる（499頁）。さいごの垂れ飾りのついた2本の柱は、注連縄を渡し鬼の目をつけた、鳥居に外ならない。鳥形をつけた2本の柱と、馬の剥ぎ皮をつけた柱が、3本柱を形成している。『荆楚歳時記』に出ているような、鶏から始まり、いくつかの動物を経て人間に到る図式が簡略化したのが、この形式であろう。シャマンは、このような鳥つきの柱を立てることにより、病人を治す。鳥は、心身ともに衰弱した、現実の病人を賦活し、治癒するのである。別の文化では、鳥は年の変わり目に出現し、他の文化では、病人に出現する。

旧満州の松花江の下流に住む、ツングース系のゴルディ族の住居の西端に3本の柱が立っていて、まん中の柱は3メートル余りあり、いちばん高く、上部に蛇、亀、蝦蟆などの神形が描いてあり、左右の2本の柱には、木の神鳥がついていた。この2本の柱の前には、木偶が2本立っていて、平頭のものは男神、尖頭のものは女神を表した（秋葉隆『朝鮮民俗誌』名著出版、1980<1954>年、264頁）。メッカのカアバ神殿の内部の3本柱のうち、2本の根元に、男女の石像があったのと符合する。カアバ神殿の主柱には、マリアとイエスといった母子神の姿が彫刻してあったが、この母子神は、祖先神を表したのであろう。ゴルディ族の長大な主柱には、蛇や亀などの、たぶん、トーテムを表す動物が彫られていた。さらに、前掲書によれば、間宮海峡に面して海岸部に住むオロチ族の場合には、人面を彫った柱3本と、木の鴨4個を止まらせた横木が見られる（265頁）。この場合は、人像と鳥像が、他の文化とは、やや異なった表れ方をしている。

韓国の村の入口には、男女1対の神木が立っていた。神木は、自然の木の根の方を頭につくり、人の形を表していた。木像の根元には、村人が村を出入りする際に置いていった積み石の山があり、この障害によって、悪霊や疫病が村に侵入するのを防げると思われていた。神像には、木像と石像があり、チャンスンと呼ばれ、長生の字があてられた。全羅北道東門里では、集落の入口に立つチャンスンとは別に、堂山^{だんさん}がある。堂山は4メートルほどある、四角い石柱で、頂上に、

石の鳥が止まっている。堂山の下部は、衣と称して、太い綱がぐるぐる巻いてある。旧正月15日が堂山祭で、古い綱を焼いて、新しい綱で綱引きをしてから、その綱を堂山に巻く（『自然と文化』33、日本ナショナルトラスト、1991年、67頁）。堂山は竿ではなく、石柱であるので、かなり進んだ、様式化した段階である。鳥竿が進化したものに違いないが、中国の華表に、ある程度似ている。華表の頂上には、石獣がうずくまっているが、堂山では鳥が止まる。山という字があらわれているのは、古い時代、この石柱が、積み石の山の上に立っていたことを物語っている。

日本にも類例があった。それは、旧正月15日に行われた斎の神祭りの左義長であった。小千谷^{おぢや}では、毎年、定まった場所に、さしわたし3間ばかり、高さ6～7尺の円い壇を雪でつくり、2か所に階段をつける。俗にこの壇を城と呼ぶ。壇の中央に、杉のなま木を立て、正月に飾ったものをこの柱に結びつけ、あるいは積み上げて、注連縄で、上から結びめぐらして蓑のようになり、先端に、扇で飛鳥の形をつくり、とりつける。そのあと、村の首長が礼服をつけて拝をなし、浄火をつけて燃やす。（鈴木牧之『北越雪譜』岩波文庫、1936年、242-243頁、244-245頁の挿絵）。木に正月飾りを結びつけた注連縄は、堂山の綱にあたる。堂山の綱は、衣に例えられていたが、小千谷の斎の木には、注連縄がぐるぐる巻かれていた。これらは、小正月に焼かれた。この綱は、ヘルメスの杖カドゥケウスに巻きついた、2匹の蛇と同じものではないかと思う。この杖の上部には、鳥の翼がついていて、中国の華表を想起させる。境界の神ヘルメスの象徴であるカドゥケウスは、堂山であり、小千谷の斎の神であった。浄土教の仏典に出てくる浄土の樹木は、宝石や真珠をちりばめた羅網で覆われ、その上に小鳥が飛び交っている。浄土の木には、蛇は巻きつかないが、この羅網こそ、注連縄を巻つけることによってできたものであった。朝鮮では、村の臨時大祭である別神という祭りでは、別神竿が立てられたが、竿の頂上には、1～3個の鳥形あるいは、竜蛇の形がつけられていた（秋葉隆、前掲書、233頁）。朝鮮の神竿は、積み石の山の上に立てられたので、蛇は、大地のへそから這い上がってきたと考えられる。古代ギリシアの聖域デルポイには、オンパロスというへそ石があった。デルポイというギリシア語は、子宮を表す梵語、ガルバと同系の語で、オンパロスというギリシア語は、へその意である。アポロン神殿の至聖所に置かれていたへそ石は、下半分が円柱形、上半分がドーム形に近い円錐形をしていた。表面には、全面にわたって網目の浮彫りが施されていた（『デルフォイの聖域』世界の聖域3、講談社、1981年に写真がある）。へそ石には、2羽の鳩の像が頂上にあった。伝説によると、世界の2か所から、鳩が飛来してきて、落ち合った所が、デルポイのオンパロスであったという。円柱形の壇の上に、円錐が載り、その上に鳥が2羽いる。小千谷の斎の神は、丸い雪の壇の上に、円錐形の正月飾りの積み上げと、頂上の鳥から成る。形式としては、ギリシアのへそ石と同じものである。斎の神をぐるぐると巻いた注連縄は、ギリシアのへそ石の網目と同じものである。へそ石は、いいかえれば、大地のへそで、蛇は、大地や土と深い関係をもっていた。アポロンは、ピュトンという大蛇を殺して、へそ石の下に埋めたが、この大蛇は、アポロン神の他我であった。アポロンは、年末になって、心身ともに衰弱したとき、他我である大蛇を殺して、その力を身につけた。

大蛇はよみがえり、石積みの中から出現して、鳥竿を上がった。これが、カドゥケウスの発生である。カドゥケウスは、境界柱であった。

ヘルメス自身も、図像によれば、くるぶしの所に翼があり、大速力で空中を走ることができた。その杖にも翼がつき、一種の鳥人といってもよかった。ヘルメスは、聖なる牛と深い関係をもち、その杖は、聖樹と蛇と鳥を表すので、有翼人面雄牛像と同じような、境界の表象であった。

1940年、フランスのドルドーニュ県のモンティニャクの近くで発見されたラスコー洞窟の壁面に興味深いものがある。鳥の形をした頭部をもった男が、1頭の野牛 — 槍に突き刺されて、脇腹から内臓が露出している — によって殺される。いっぽう、むく毛の犀が、この野牛を引き裂いて、静かに去ってゆく。この男の前には、鳥形を載せた、古代エジプトのスタンダードのような柱がある。この画は、この洞窟に埋葬された、死せる狩人に捧げられた絵馬だといわれる (E. O. ジェイムス『古代近東における神話と儀礼』ロンドン、1958年、23頁)。古代エジプトでは、行政区ごとに、標識をもっていた。それは、長い竿の上に板を水平に打ちつけ、板の上に、彼らが神として崇拝する動物の像を載せたものであった。このスタンダードは、それぞれの行政区で行列が行われるとき、いつも先頭を進んだ。行列は、再生儀礼の1つであったので、スタンダードに先導されて、祖先神の国へ参入し、よみがえるのを目的とした。ラスコーの洞窟画に、鳥竿が見られる。恐らく、祖先神観念があり、死せる狩人のよみがえを祈願した絵馬であろう。彼は、ヘルメスのように、鳥人となって、洞窟・境界から、あの世に飛翔しようとしたのであろう。

19世紀の後半にいたるまで、タイでは毎年、仮の王が選定され、3日間奇妙な儀礼が行われた。その間、真正の王は、宮殿の中に閉じこもっていた。仮の王は、婆羅門僧らが、五月柱のように、五色の布テープで飾られた柱に綱でぶら下がって、ぶらんこをし、踊るのを見ていた。およそ3時間、仮の王は片足で立って、見なければならなかった。もし、足を下ろすようなことがあると、王国に危害を及ぼすと信じられた。19世紀の後半になって、仮の王は、もう片足で立っていなくてもよかったが、椅子に腰掛けて、片足をもう1つの片足の上に上げておかなければならなかった。婆羅門僧らは、90フィートの高さの2本の柱に懸けられたぶらんこに乗って、空中を飛翔した (J.G. フレイザー『死にゆく神』ロンドン、1911年、151—152頁)。ぶらんこで空中を飛ぶ儀礼は、豊作を祈願するために行うとされるが、鳥人が柱の上で飛翔する、シャマン的な実修であったと考えられる。仮の王が、真正の王の代わりに、再生儀礼を行ったのであるが、彼自身は、片足を上げて、1本足のまま立って、彼の代わりに鳥人を演じる婆羅門の飛翔を見ていた。1本足による佇立は、ある種の鳥の習性にならったのであろう。人間の身体は、片方は死を、もう1つの片方は生を象徴するので、再生のために、生の方の片足を上げて置き、儀礼が終了したら、それを地上に下ろして、2本足で立ったことも考えられる。英国とフランスでは、18世紀ごろまで、クリスマス前夜、あるいはクリスマスの朝、みそさざいを狩りにゆき、見つけると殺して、その羽を払って棒の先に結びつけた。殺した鳥は、棺架に載せて、教区の墓地まで行列で送り、埋葬した (フレイザー『穀物と野生動物の霊魂』2、ロンドン、1912年、318—321頁)。ヨーロッパ

にも、鳥竿があったことを示す例である。鳥は現実の鳥で、キリストの再生のために殺され、鳥竿につくられて、人々の再生をうながす。中国の華表は、移動することはないが、みそさざいの羽をつけた棒は、行列と共に移動する。俗界と聖域、旧い年と新しい年の、それぞれの境界に鳥竿がある。

敦煌莫高窟第17窟の北壁に描かれた壁画を分析してみよう。この窟は、他の窟と違って仏伝の絵がない。この窟は、9世紀中葉、都僧統として徳の高かった洪誓^{こうべん}を祭った祠堂である。壁画の左右には、種類の違った2本の樹木がある。それぞれの樹上には、2～3羽の小鳥が飛んでいる。左の木の下には、みずらに結った、男装の女性が立つ。右の木の下には、大きな団扇を手にした尼僧が立つ。団扇には、鳳凰の文様が描かれている。左の木の枯枝には、肩かばんが懸けてあり、右の木のそれには、水瓶が懸けてある。北壁に面した祭壇の周囲には、草花の茎をくわえた2頭の鹿と、獅子の図がある。(敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟』4および5付篇、平凡社、1982年。同『敦煌石窟』平凡社、1982年。井本英一『境界 祭祀空間』平河出版社、1985年、238-257頁)。洪誓像、2本の木、木の上の鳥、木下の人物、動物のモチーフを見ると、この場所が洪誓を祭る場で、鳥竿と動物が入口の鳥居の原形となり、みずらの像と尼僧像は、入口に立つ、2柱の神の変形であることがわかる。第17窟の西側には、洪誓の告身碑がはめ込まれてあり、その前に供物を供えるようになっていた。この構造は、古代エジプトの墓に見られる、あの世へ通ずる見せかけの門で、この窟が、この世とあの世の境界に位置していたことを物語っている。

古代イランの神話では、神話の湖であるウォル・カシャ湖(現実にはカスピ海やアラル海が想定される)のまん中に、あらゆる医薬を内蔵する鶯の木が生えていて、全ての植物の種子が、この木の中に宿っている(『アヴェスタ』「ヤシト」12.17)。この木は、その対偶であるガオケレナ樹とともに、いわゆる生命の木で、たぶん、同じ木の別名と思われるが、フービー、つまり、よき水分を有するという名ももっていた(「ウィデーウダート」5.19)。鶯というのは、サエーナ鳥のことで、ペルシャ語では、シームルグの形で伝わっている。聖鳥サエーナとあらゆる種子の木の結合、さらに蛇との結合は他の文化にも見られることを、ウノ・ハルヴァの前掲書は述べている(71-72頁)。湖の中に生える生命の木は、水中から樹木がそのまま突き出しているのではない。水上に、いわば、オノゴロジマのような原始の丘ができ、そのまん中に生えるのである。古代イランの生命の木には、他の文化に見られるような人影はない。

近世イランの伝承では、聖樹は湖上に2本生え、鳥も2種類になる。シームルグは、最初に創造された鳥で、その巢は、湖水の不死の木の近くにある、あらゆる植物の精を内蔵した木の上にあった。。この木には、各種の植物が、その年につくった種子が宿されていた。シームルグの役割は、この生命の木を揺って、種子をばらまくことであった。種子がばらまかれると、こんどは、別の鳥チャムロシュが集めて、ティシタル(シリウス)星が降らした雨の中に浸す。このようにすれば、乾燥地帯では、発芽が速められる。あらゆる種子を内蔵する木と不死の木が、2本で1

体のものと考えられた。それぞれの木には、特定の鳥があてられた（A.G.ウォーナー、E.ウォーナー『フェルドウシーのシャナーメ』1、ロンドン、1905年、236頁）。近世ペルシアの伝承でも、生命の木が2本になっている。この方が、より古い形であったかも知れないのである。この場合は、植物の成長と人間の医療のための儀礼に、これらの生命の木が利用された。

『続日本後紀』仁明天皇天長10年11月16日の大嘗祭の辰日の節会について、次のようにいっている。天皇は、辰日に豊楽院に出御した。悠紀と主基の標を立てた。悠紀の場合、慶山の上には梧桐を栽え、樹上に鳳と凰が止まっていた。樹中から五色雲がたち昇り、雲上には悠紀近江の4字を懸けていた。その上には日像、さらにその上には半月像を懸けていた。主基の場合、慶山の上には常緑樹を栽え、樹上に五色雲がたなびき、雲上に霞がかかり、霞中には主基備中の4字を懸けていた（川出清彦「大嘗祭における稲のお取扱いについて」『新嘗の研究』2、学生社、1978年、26頁）。大嘗祭の標の山は、一定したものではなく、上のものも1例であるが、極めて興味深いものがある。慶山に立てる樹木は、榊一式ではなく、一方は落葉樹、他方は常緑樹である。悠紀の梧桐の上にだけ、鳳凰の姿がある、ギリシアのオンパロスの上に、2羽の鳥が止まった伝承を想起させる。両方の樹木には、雲や霞をたなびかせているが、その方法は、網を張って綿花（綿のない時代は、それに代わるもの）を、木に被せたとされる。慶山は砂の山で、樹木は、伐り出したものと鉢つきのものとの2通りがあったであろう。冬至前後は、梧桐は黄葉、落葉が進み、衰弱を象徴するに相応しい樹種であった。常緑樹の方は、樹勢は停止していても、活力を象徴していた。死と衰弱を象徴する木に、鳳凰や日月を配し、さらに本文では、山の前には、天老（仙人）や麒麟像が立ち、後ろには、連理の呉竹があった。主基の山の上には、童子に西王母の仙桃を盗んでこさせる像や、鸞鳳や麒麟などの像があり、その下に鶴が立っている。このとき、悠紀の標が、風に吹かれて折れたので、工人らが支え持って復原したとある。偶然か必然か、はっきりしないが、標には死と生の二元論的な表象があり、突風で折れるにまでいたっている。梧桐には、徒長枝が1メートル以上も伸びる性質があるので、この枝が、突風で折れたのかも知れない。切り出しであれ、鉢付きであれ、梧桐の幹は、風で折れることはない。前掲書によると、標の高さは、かなりのものであったらしい。大嘗祭の標ではないが、『東大寺要録』に出る、貞観3年3月の、大仏修理供養大会^{だいよう}において、舞台の北端に標1基を立てているが、その高さは、3丈3尺とある（25頁）。自由に移動できるようにつくれば、祇園祭の山鉾となる。

標の山は、鳥竿の1つである。鳥竿の下には、人間や麒麟や鶴の像が置いてあった。慶山は、本来なら、水面に浮かぶ原始の丘であるべきであったが、その記憶は失われたようである。聖樹に雲や霞を被せるのは、聖樹に網を被せたり、莫高窟第17窟の北壁の2本の樹木のように、枝々につるが巻きついたりするモチーフと同じで、生命の木に宿る魂を閉じ込める呪術であった。通過儀礼で、このような網を使うのは、たましずめ、すなわち鎮魂のためであった。これによって、儀礼の実修者は、魂を身につけ、新しい生に向かって踏み出すことができた。

標の山や山鉾は、日本独自のものでなく、その同類は、中国やヒマラヤ地方、インド、イラン

からヨーロッパにわたって見られる。生命の木と、その上に止まる鳥のモチーフは、莫高窟の絵だけでなく、中国の神話にもある。中国の神話には、揺銭樹がある。この木は、大地の中央を表す山に立つ世界樹である。四川省から出土した揺銭樹の1つは、高さ144センチあり、これまでに発見された揺銭樹のうちで、もっとも大きい。この揺銭樹の先端には朱雀がとまっており、その前に人がいて、朱雀の口に丸薬を入れている。朱雀と並んで、1人の羽人がおり、日月を捧げ持っている。太陽には金鳥がおり、月には玉兔がいる。朱雀と羽人との間には、4枚の大きな銅銭が置かれ、ひもで連結されている（小南一郎『中国の神話と物語り』岩波書店、1984年、57－58頁）。中国の揺銭樹と日本の標の山は、構造的に見て、同じものである。中国では、樹木に銭が結ばれる点が、日本の場合と異なるが、聖樹、台座の山、動物、人など、全てがととのっている点は同一である。中国では、樹上の朱雀に、人が薬を与えている。揺銭樹は、おそらく、墓に埋葬されたものなので、死者の再生・復活を祈願するためのものであった。朱雀は、この場合、死者の肉体から抜け出した靈魂と見なされていたので、死者の魂を賦活するために、丸薬を口に入れたのであろう。

韓国の大田近郊で発見された農耕文青銅器の表面には、男根を出した裸の男が畑を鋤いている刻画がある。裏面には、2本の枝のようなものの先端に、鳥が1羽ずつ止まっている刻画がある。この鳥は、鳥竿の鳥を連想させる（金烈圭著・泊勝美訳『朝国神話の研究』、学生社、1978年、51－52頁）。著者もいうように、李朝時代にも、春の裸耕があったが、これも、豊穡を祈願するものであった。盤亀台の刻画の中にも、男根を出した裸像があったが、動物の繁殖を願う呪術的意図を蔵していた。鳥が、春の植物の再生と関わっていたことを表している。

韓国では、かつては、村の入口に、天下大將軍と地下女將軍と彫り込んだ、根の方を上にした木が立てられていた。村を出入りする者は、そのたびごとに、子供の頭大の石を手に取り、それに唾を吐きかけて、木像の周囲に積んでいった。結果的には、石積みの高さは、かなりのものになり、外部から侵入してくる災いを防ぐことができると考えられるようになった。この2本の木像のそばに、1本の細長い竿が立ち、その頂上には、木の鳥が止まっていた。この竿は、スサルテとかソッデと呼ばれた。鳥は鴨であるといわれる（秋葉、前掲書、149頁。李杜鉉他著、崔吉城訳『韓国民俗学概説』学生社、1977年、161頁）。入口にいる男女神の木像は、チャンスンと呼ばれ、長生などの漢字をあてる。スサルテには、20～30尺ある竿に横木を渡し、その上に、木鳥を1個ないし3個のせたものもある。この鳥が、村に侵入する邪鬼を発見して、その下にいる長生に知らせる。すると、長生は、邪鬼を退散させるといわれている（韓炳三著、今津啓子訳『韓国大田出土の農耕画青銅器』『えとのす』31号、新日本教育図書、1986年、64頁）。

韓国の済州島には、かつては村の入口であった所（今は畑になっている）に、左右2基、石を円錐状に10メートル積み上げ、頂上に鳥形の立石を立てたものがあり、タブ（塔）と呼んでいる（鳥越、前掲書、117－118頁）。10メートルもある円錐形の石積みは、小型のピラミッドであるが、その上に、それぞれ1羽の鳥が止まっている。ギリシアのデルポイのヘソ石は、1基の円錐

の上に、2羽の鳥が飛来して止まった。韓国には、これとは別に、高さが4メートルある四角い石柱で、頂上に石の鳥形がついた堂山があることは前述した。堂山には、綱が巻いてあった。それは、蛇とも綱ともとれる。ピラミッドの上に、さらに柱が立つ形式は、中国の神話にもある。

『東方朔神異経』にいう。崑崙山には銅柱があり、高くそびえて天に突入している。いわゆる天柱である。その周りは3000里、円くて、その周囲は削ったようである。上に大きな鳥がいて、^{りゅう}希有と呼ばれる。この鳥は、左の翼で東王公を覆い、右の翼で西王母を覆っている（小南、前掲書、64頁）。この場合、東王公と西王母は、韓国の男女の長生にあたり、銅柱とその上の鳥は、高く立つ鳥竿スサルテにあたる。崑崙山は、柱の下の積み石の山にあたる。

鳩は、セミラミス女神の聖鳥とされたが、女神と同系のアスタルテやアプロディテの聖鳥でもあった。古代のアプロディテ崇拜の中心地であった、キュプロス島南部のパボスのアプロディテ神殿には、貨幣の浮彫りや黄金の模型によると、2本の柱が立っており、その先端に、それぞれ鳩が止まっていた。あるいは、2本の聖角のうち、外側の聖角に、1羽の鳩が止まっていた。礼拝所の前には2本の柱が立ち、柱の先端には丸い球がついていた。柱の間には円錐形の物体があり、2本の柱の上部には、新月と星の文様があった（J.G.フレイザー『アドニス・アッティス・オシリス』1. ロンドン、1914年、33頁）。聖角は、新月を象徴する。トルコの国旗には、この新月（三日月とは弦の位置が左右逆になったもの）と星の文様が用いられている。イスラム教の象徴でもあるこの新月＝聖角は、古代西アジアの伝統である。アプロディテ神殿の前の2本柱が鳥竿であるのは、東アジアの鳥竿と同類である。その上にある新月と星は、上述したように、トルコ国旗の文様に受け継がれている。星は、天体としての星ではなく、2つの三角形をずらして重ね合わせて六角形をつくり、それを基本にして、五角形その他をつくり出だしたのであろう。聖角や三角形は、天体ではなく、他の聖なる物体であった。2本柱の間にある円錐は、ギリシア文化では、アプロディテ自体とされたが、本来は、円錐状に積まれた祭壇で、その上に立てられた柱が、ひと柱の神とされたのが、古い形式であろう。神殿の前の2本の柱の先端には、鳥ではなく、球体がついていた。球体は、旗竿の先端につく球体と同じもので、もとは、竿の先端に安置された、トーテムの鳥獣であったと考えられる。アプロディテ神殿の柱の球体の場合は、鳩であった。

イスタンブルの古代オリエント博物館蔵のアシュル出土の礼拝用燭台に彫られた図では、先端に8本の輻をもった車輪をつけ、その下に三日月をつけた2本の柱が、頭上に同上の車輪をつけた2人の人物によって支えられている。柱の間には、左手に棍棒をもち、右手で礼拝の姿勢をとる王が立っている（J.B.ブリチャド『写真で見る古代近東』ニュー・ジャージー、1969年、577図）。2本の柱は旗の原形で、上述のアプロディテ神殿入口の2本の柱と同じものである。三日月といわれるのは、翼のことで、中国の華表と同じものを想定させる。ギリシアのヘルメスの杖では、はっきりと鳥の翼として表されている。ヴァン湖岸の岩に彫られた、シャルマナセル3世が神々に供儀する図では、王は積み石の山の上に立って、2本の、前と同じ柱の前で、礼拝の姿

勢をとっている（ブリチャド、前掲書、625図）。この図では、2本の柱の間に石積みがあり、石積みの上には、浄木ではなく、神としての王が立っている。

ヘルメスの杖カドゥケウスは、上部に鳥の翼があり、杖を2匹の蛇が取り巻いている。1本の柱に、鳥と蛇が共存する。韓国の錦江流域の踏査をした鳥越憲三郎によると、小村の小学校の裏に1基のタブ（塔）があり、その近くに、2本の高い木が立てられ、1本は竜が巻きついたように彫っており、他は、先端に鳥が止まっていた（鳥越、前掲書、121頁）。日本や韓国の鳥居や鳥竿に、注連縄や禁縄が巻かれたり、張られたりしたものがある。縄が蛇を表すことは、間違いなさそうである。

トルコのイスタンブールにある、ブルー・モスクの西側に広場があり、2世紀初頭、ローマ帝国皇帝セプティミウス・セウェルスによって建設され、のちに、コンスタンティヌス帝によって拡張された馬車競技場がある。その縦の正中線上に、エジプトから390年に将来したオベリスクと、先端には黄金の玉を載せていたが、今は上部が失われ、その1部が博物館に陳列されている、3匹の蛇がからみ合った、5メートルほどの高さの銅製の柱がある。この柱は、イスタンブールに残るギリシア記念碑の中でも最も古く、プラタイアの戦いで、ペルシア軍を破った31の都市によって紀元前479年に建てられたもので、戦死したペルシア兵の盾から鑄造された。下部には、都市の名が記されている。この他に、もう1基のオベリスクがある。それは、940年、コンスタンティヌス7世が、石灰岩でつくられたものであるが、ここでは、問題外である。ギリシア戦役での、戦死者を祭る祠堂の前に、蛇の柱が立っていたことは、明らかである。のちに、エジプトのオベリスクが将来されたが、それ以前、蛇の柱と1対になった、別の柱（蛇形ではない）があったと考えられる。蛇の柱と、この柱の柱頭には、球体があった。キプロス島の古都パロスにあった、アプロディテ神殿の前に立っていた2本の柱の柱頭にも球体がついていた。古代西アジアの浮彫りでも、柱には、丸い車輪がついていた。

古代バビロンの入口の敷居上には、強力な複数の蛇が、からみ合って直立し、もう一方には、青銅製の雄牛が立っていた。また、バビロニアの領土の境界に立つ、男根形境界石には、1匹の蛇が巻きついていた。古代エジプトの王の王冠上には、蛇—ときには有翼の—と、雄牛の角の間に安定した円形あるいは球体がある。テーベの神殿の入口には、蛇と有翼太陽円盤が見られる（H.C. トランブル『敷居上での契約』エディンバラ、1896年、234頁）。蛇は生命力の象徴として、死者を埋葬した敷居から、立ち上がる。蛇は墓穴に住むので、死者の再生を促進させるとされた。鳥の姿こそ見られないが、有翼表象が残存している。この点は、境界神ヘルメスの杖カドゥケウスの蛇と翼と同じである。中国の華表は、柱身に蛇がとぐろを巻いた菱形の文様が、びっしりと規則正しく彫刻してある。それは単なる装飾ではなく、古い伝統にもとづくものと考えられる。ヘルメス像は、古くは四角い石柱で、頭部が彫っており、男根が取り付けである簡単なものであった。頭には頭巾、胸にはよだれ掛けがつけられたものもあった。ヘルメス像は、韓国の長生にあたり、その杖は、その側に立つ、鳥竿にあたる。いずれも、境界に位置した。ヘルメスの

語は、海岸の磯に頭を出した岩場ヘルマに由来する。ヘルマは、海中から出現した原始の島にあたるもので、ヘルメス像は、その島に立った柱が、その起源であったと思う。

密教で用いられる護摩壇には、鳥竿その他が縮小されて用いられている。護摩壇は、本来は土壇で、毎回、修法ごとに築かれ、終わると破壊されて、土に戻された。この点、ヘブライ人の祭壇とよく似ている。日本では、護摩壇は木壇となり、修法後も破壇されることなく、常設されるようになった。壇の中央に火炉があり、火を焚くが、行者の前には、2本の70～80センチぐらいの柱が立ち、鳥居と呼ばれる。鳥居の柱頭は、球状になっている。球体は、他の例から推して、本来は鳥であったと考えられる。四角い壇の角には、それぞれ楸と呼ばれる20～30センチの柱が立つ。この柱の先端部にも球がつき、その下には、それを受けるように蓮華がついている。柱の中央には、邪視除けの鬼目がつく。鳥居と4本の楸には、壇線という五色線が張りわたされ、鳥居には、左右の柱に巻きつける。韓国の鳥竿に張った注連縄や日本の同類のものには、鬼目籠がぶらさげである。護摩壇の鳥居と四楸と壇線は、本来は、2本の鳥竿と4本の長生に相当する像で、壇線は、五色に輝く蛇であったと考えられる。英国などで行われた、5月1日のメイデーの柱（メイ・ポール）は、先端にまだ緑の枝葉を残した生木に、五色のテープを垂らし、1本1本のテープを子供がもって、木の周りを歌いながらまわる。メイ・ポールは、五色の蛇が巻きついた木であるといえる。五色のテープは、護摩壇の壇線にあたるからである。メイ・ポールは、生命の木で、上部には小鳥が飛ぶ姿を想像させたであろう。

『旧約聖書』によると、生命の木と善悪を知る木が、エデンの園の中央にあった（「創世記」2．9）。エデンの園のあらゆる木になる果実は、取って食べてよかったが、善悪を知る木の果実は食べてはならなかった。エヴァは蛇に誘惑されて、その果実を食べ、アダムにも食べさせた。かくて、2人は裸を覆うようになる。神は、2人が生命の木から果実を取って食べ、不死になるのを怖れ、2人をエデンの園から追放した（「創世記」第3章）。この伝承では、2本の木のうち、1本の木に蛇が関係するが、蛇は生命と再生を意味するのではなく、死を意味するようになった。生命の木にも、善悪を知る木にも、鳥が飛ぶ名残はないが、楽園の光景として、考えられるものである。

日本では、縄文時代中期後半では、室内の炉より奥の場所に、立石、石棒、石壇が設けられ、その前で炉の火が燃えていた。立石、石棒は、中期前半では、集落中央の広場に樹立されている場合が多かった（桐原健「八ヶ岳縄文集落」『えとのす』8号、新日本教育図書、1977年、125頁）。八ヶ岳の縄文文化は、終始、蛇の表象と共にあったが、立石や石棒にも、蛇に関連するものがあったと考えられる。密教の護摩壇では、鳥居は火炉の前にあり、四楸は火炉の四周にあるので、縄文時代の位置は逆である。炉は、中期以前には、家の入口に設けられていたので、立石や石棒が、家の入口にあった時期も想定できる。石棒は、単なる石の棒ではなく、30～50センチぐらいの長さの男根石である。男根石は、球体をつけた棒であるので、蛇と一体になれば、鳥竿と蛇の原形となる。『プルターク英雄伝』（一）（河野与一訳、岩波文庫、1952年）「ロムルス」

にいう。あるとき、タルケティウス王の家に、神の兆しが現れた。そこのかまどから、男根が生えてきて、いく日も消えなかった。王女は、この男根に触わるように命じられたが、侍女にそれをさわらせた。その結果、侍女は双子を生んだが、タルケティウス王は、テラティウスという男に渡して、殺すように命じた。男は2人を川辺に置いたところ、雌狼が現れて乳を与え、いろいろな鳥が食物を運んできて与えた。2人は牛飼いに拾い上げられて成長し、父タルケティウスを殺し、弟のロムルスが、ローマを建国した(57-58頁)。家のかまどに立った石棒は、出産の原動力となった。炉やかまどは、女性原理とされた(60頁)。別の伝承では、ロムルスは、生命の木であるイチジクの木とキツツキ鳥に関係づけられるが、この伝承では、柱と鳥と動物と出生が一体となっている。

5世紀の記録である、法頭の『法頭伝』(長沢和俊訳注『法頭伝・宋雲行記』平凡社、1971年)によると、仏教国となっていた中央アジアの于闐国の家々の門前には、小塔が立てられ、もっとも小さいのもで、高さおよそ2丈ばかりあった(17頁)。小塔は、木でつくられたものか、石を積み上げたものか、はっきりしない。本文には、それにつづいて、四方に僧房をつくり、客僧やその他の重要な人に使わせているとある。これは、小塔の四方の部屋のことではなく、院子式の家屋の周囲の部屋を指したのであろう。韓国済州島の村の入口に積まれた石塔タブを想起させる。于闐国の場合は、かなり仏教様式化していたので、小塔上の柱頭には、鳳凰に類する鳥が止まっていたであろう。中央アジアの家々は、現在もそうであるが、かまどは家の入口にある。かまどや炉とこの種の塔は、本来は一体のものであったが、別々に分離発展したのであろう。于闐の家々の前の小塔は、起源的には鳥竿であった。ギリシアの家々と道路との境、つまり門にあたる場所には、ヘルメス像が立っていた。ヘルメスの杖は、鳥と蛇と柱が合成されたものであったので、家々の前の小塔といわれたものは、同類のものであったと考えられる。

炉の中から、男根が出現したという伝承があるが、男根は、それ以前は地中にあったことになる。古代バビロニアの神殿の敷居の下や、土地の境界には、男根形の境界石が多く見られる。契約の儀式は、この石を立てて行われた。境界石を移動させる者に対する、呪いのことばが、石に彫り込んであった(トランブル、前掲書、166-167頁)。同じセム人であるヘブライ人の契約でも、似たことが行われた。アブラハムは、もっとも信頼を置いた、年寄った下僕に、手をアブラハムの腿の間に入れ、天と地の神である主に誓わせ、息子イサクの嫁を、彼らが住んでいるカナンの娘から取るのではなく、アブラハムの故郷へ行って、連れてくるように命じた(「創世記」24.2-4)。生殖器、ことに男根には、神の意志が宿ると考えられたのであろう。その後も、ヤコブも、同じようなことをさせて、神に誓約させている。この場合、男根は露出しているのではなく、衣服の下に隠れている。

英国のストーン・ヘンジの中心部にある、巨大な三石塔の内側の地面の地下、約4.6メートルの所に、祭壇の石と呼ばれる石が埋められている。この石は、ストーン・ヘンジの主軸に垂直でも平行でもない。そのため、それは、もとの位置から動いているのではないかとも考えられてい

る。しかも、その石が、もともと立っていたはずの穴も見つかっていない。その穴は、その下に埋もれているのかも知れない（G.S. ホーキンズ著・竹内均訳『ストーンヘンジの謎は解かれた』新潮選書、1983年、74頁）。ストーン・ヘンジの中心部は、祭壇の位置であつたらしい。その場所は、あの世への入口であつた。神との契約をなすとき、かつては、もう少し上に埋めてあつたであろう石を起こして、それを行つたが、行事が行われなくなるか、石を起こさなくてもよいとされるようになったとき、深く、無造作に埋められたのであろう。この祭壇石と呼ばれる石は、三石塔の2本の立柱の間に祭られた3番目の石あるいは石柱で、神そのものであつた。神は創造の原理で、男根で象徴されるようになった。朝鮮半島南部や九州北部に残存する支石墓（三石塔の1つの表れ）の2本の支柱石の間には、円錐形の石積みが残されたものがある。この空間に、かつては積まれていたと思われる石が、散乱している場合もある。支石墓の場合、積み石の下かなり深い所に、巨大な甕棺が埋蔵されている。縄文時代、立石、石棒、石壇が、炉より奥に設置された場合でも、入口に甕が埋められた。内部には、黒土が充満していたので、胎盤その他の有機物が入られていたことがわかる。甕や壺は、子宮を象徴した。支石墓は、命名者が墓として限定したので、そう呼ばれるが、鳥居の1つと見ることができる。天板の岩が横木にあたる。鳥の表象はないが、供物を捧げたときは、鳥は自然に天板の上に集まる。支石墓は鳥居であり、入口であつた。入口に死体を埋葬する風習は、日本をはじめ、世界の多くの地域に残っていた。入口には、男根や子宮の象徴が埋められ、生殖の原点となった。埋葬された死者は、再生することを期待された。現在、インドやネパールなどの寺院入口上部に、男女が交合する図が描かれていることがある。この場合は、男根と女根が表面に露われたものである。

エトルリア地方のタルキニアの墳墓群の中に、雄牛が2組の交接する人物のそばに、それぞれ描かれているので、雄牛の墓と呼ばれる墓がある。左右2つの墓室の入口の上には、2人の男と女の性愛図と、2人の男（あるいは男女かも知れない）の性愛図がある（岡村崔撮影、青柳正規他訳『エトルリアの壁画』岩波書店、1985年、157-160図、解説。池田正三『エトルリア芸術の逍遙』大阪芸術大学出版局、1980年、86-87）。墓室の入口の性交は、寺院の入口の性交と同じで、中に祭られた死者や神が賦活されて、再生するための呪術であつた。あるいは、そこを通過する者が、よみがえる呪術であつた。ユダヤ教の教会堂の入口にも、かつては、この種の性愛図の彫刻があつたが、いまは博物館でしかお目にかかれなくなった。美術として発達する前のヘルメス像は、男根をつけていた。また、アカ族の村の入口の門柱の根元には、ヤダとミダと呼ばれる男女2体の祖先像が置かれる。この人形は、自然木の股木を利用してつくられるが、股木のところに、性器が彫られている（鳥越、前掲書、131頁）。縄文時代の炉のそばにある石棒はマラ石で、炉の下に、それより古い時代に、死体を埋葬した時代があり、その死体が、マラ石と女陰の象徴である炉によって再生すると考えられたのであつた。

豊玉姫が山幸彦を追って海岸に着いたとき、産気づいたが、鵜の羽で屋根を葺き終わらないうちに、出産してしまった。出産は、古代の習慣どおり、炉の傍で行われたであろう。豊玉姫は、

『日本書紀』本文では、竜になって出産する。『書紀』の異伝や『古事記』では、ワニになったとある。産小屋の炉の傍には、大黒柱にあたるものが立っていた。この神話には、鳥の羽、柱、竜（蛇）と炉と出産の表象が見られる。ローマの建国神話では、竜（蛇）が男根で表象され、キツキ、イチジク、炉が現れる。さらに、狼が捨て子になったロムルスとレムスを育てる。

奈良東大寺二月堂のお水取りは、火と水の祭典として、1240年ばかりの間、修せられてきた。東大寺の開基良弁の伝説にいう。その母が赤ん坊をあぜ道に置いて仕事をしているとき、赤子が鶯に掠われて悲嘆にくれていた。鶯は、赤子を、のちに二月堂が建てられた場所にあった杉の木の頂上で育てた。赤子は成長して、義淵の教えを受けて学僧となり、東大寺を開いた（『東大寺要録』『沙石集』他）。これが、二月堂の前に立つ良弁杉の名の由来である。良弁杉の傍に閼伽井屋があり、乾湿2つの井泉がその中にある。閼伽井屋の屋根には、鵜を象った瓦が置いてある。修二会の修行中、僧たちが、毎朝、食堂を出るとき、少量の飯を、閼伽井屋の屋根に集まる鳥に向かって投げる、サバという行事がある。二月堂では、火、水、生命の木、その先端の鳥、閼伽井屋の鳥などの表象が、ばらばらに表れる。生命の木の下動物や、竜蛇の表象は出ないが、同系統の話である。

良弁の伝説は、彼の誕生譚ではなく、むしろ、彼の捨て子譚に近い。良弁は、のちに母に再会し、東大寺に呼んで孝養を尽くした。狼に育てられた捨て子の話は、日本にもある。奥州の藤原秀衡が、熊野坐神社に参詣することになった。身重の妻と二人連れであったが、妻は滝尻王子で産気づき、赤子を生んだ。秀衡は、赤子を滝尻王子の裏山に置いて、妻を連れて旅を続けた。秀衡は、野中まで来たとき、桜の木でできた杖を地上に突きさし、赤子が無事であるなら、この杖が根づいて、桜の花を咲かせてくれるように祈った。帰途、野中までくると、杖は根づいて、花を咲かせていた。急いで滝尻まで戻ると、赤子は無事で、狐狼に養われていた（松居竜五他『南方熊楠を知る事典』講談社、1993年、529頁）。この場合は、明らかに捨て子である。生命の木としての桜の木はあるが、鳥や蛇の表象はない。ここでは、滝尻の水の中に蛇がかくされ、熊野の森に棲む鳥が、桜の木にかくされている。

生命の木と鳥獣と再生の装置は、古代中国の新年の習俗の中によく保たれていた。古代中国では、正月1日を鶏とし、2日を犬とし、3日を羊、4日を豚、5日を牛、6日を馬、7日を人とした。（『荆楚歳時記』43頁以下）。近代になっても、年の市でこれらの鳥獣を描いた桃板を買い、毎朝それを掛け替えて人日を迎えた。これらの桃板は、その日が済むと取り去るので、上下一列に掛けたままではなかった。ここでは、新年における人間の再生が、鶏に始まって、次々に魂が動物の中を輪廻し、人間に達することが強調されたようである。人間も、7日には処刑されたので、正月8日の穀物の日こそ、最終の日のように見える。穀物の日は穀霊の日で、神の日であったと思われる。

イラン神話によると、勝利神ウルスラグナは、10回の変身をして、ゾロアスターの前に現れた。最初、風の姿で現れ、そのあと、雄牛、馬、駱駝、野猪、若者、鷹、雄羊、山羊、戦士の姿をとっ

て現れた（『アヴェスタ』「ヤシュト」14.1-27）。ここでいう風の姿とは、どんな姿であったのであろうか。殷の卜辞では、風は鳳で、方神の使者を表していた。「帝の史（使者）たる鳳に、二犬を牲に用いんか」という卜辞がある（清田圭一『幻想説話学』平河出版社、1991年、152-153頁）。これは鶏、犬、羊、豚、牛とつづく、古代中国の新年の供儀と、何らかの関連がありそうである。中国の新年行事の鳥獣は、門柱に礎したり、その絵を掛けたりするが、イラン神話のウルスラグナの変身像は、柱に掛けることはない。イザナミノミコトは、最初に風の神を生んだり、次の段階でも最初に天鳥船神を生んでいる。ここでも、風と鳥は先頭にある。

アブラムは、3歳の雌牛と、3歳の雌山羊と、3歳の雄牛と、山鳩と家鳩のひなを神の所に連れてゆき、鳥以外の動物は、みな2つに裂いて、互いに向かい合わせて置いた。日が暮れて暗くなったとき、煙の立つかまどと、炎の出る松明が、裂いたものの間を通り過ぎた。主なる神は、アブラムと契約を結び、ナイル川からユーフラテス川までを、汝の子孫に与えるといった（『創世記』15.7-21）。かまどと松明は、炉と、その中に立った男根石を想起させる。このあと、アブラムの妻サライには子がなかったが、召使の女ハガルがアブラムの子を妊んだ（同、16.3-4）。ここでは、山鳩や動物を、柱に掛けてはいない。松明が柱を象徴するのであろう。ハガルがイシュマエルを出産する直前のアブラムの神との契約であった。

10世紀前半から11世紀後半にかけて、イランを支配した、ズィヤール王朝の創始者であるマルダーヴィーシュは、イスファハンのザーヤンデ川の川辺に柱を立て、春分正月から15日目の小正月の行事サデ祭を行って、即位式を挙げた。このとき、王は、小屋の中に薪を積み上げて、これに火を放ち、鳥の群れの1羽1羽の足に藁を結んで、その先端に石油を塗り、火を放って夜の空に飛ばした。いっぽう、家畜の背中にも石油を塗り、それに火を放って、地上を走らせた。焼け死んだ家畜の肉は、このあと行われた宴会で供せられた。夜の川辺は、空と陸を火でこがして壮観であった（ザビーオッラー・サファー『イランの暦と祭り』テヘラン、日付なし、103-119頁）。日本の小正月のとんどでは、『北越雪譜』の挿絵に見られるように、左義長の柱の先に飛鳥を付けて焼く。鳥は神の使者とされる前は、神そのものであったが、鳥を焼き殺すことは、神を焼き殺すことであった。神が死ぬことによって、衰弱した人間が救われて、再生できるという思想があった。とんど祭りの1つである、小正月のかまぐらの行事では、神名を書いたお札を焼いたりした。この行事は、小正月の鳥追い行事と一体になっていたが、イランの小正月のサデ祭の鳥追いと同一ように、もとは祖先神である鳥をあの世に送り返す行事であると考えられる。家畜や野獣の背中に火をつけて、野原に放ったのは、正月に、人間の世界を訪問してきた、トーテム、祖先の霊を、あの世に送り返す意味をもっていた。鳥獣に火をつけて放つのは、動物愛護の観点から見て、残酷な行いであるが、当時といえども、鳥獣になるだけ無事にあの世に帰るように願ってなされたであろう。それは、放生会につながる行事であった。

1930年、南京国立中央研究院が、松花江の下流に住む、ツングース系のゴルディ族を踏査した報告にいう。ゴルディ族サマン支族の住居の西端に木杆が3本あり、中杆は丈余でもっとも長く、

上部に、蛇、亀、蝦蟆などの神形を描いており、その左右にまた2本の木杆を立てて、先端に刻木の神鳥がついている。中杆の根本の前には、男女の小さい木像が2本立っていて、東方を向いている（秋葉、前掲書、264頁と第8図）。この場合、鳥と蛇亀類は別々の柱にいる。長生にあたる人像は、小さくなって退化している。鳥と蛇が最初に現れるが、これが単なる偶然であるのか、ヘルメスの杖の鳥と蛇、鳥居の原形に見られる鳥と蛇と同じものなのか、興味のあるところである。これは、トーテム・ポールに近い。

カナダのブリティッシュ・コロンビア州や、米国のワシントン州にかけて居住するインディアン諸種族は、トーテム・ポールの伝統を保持している。トーテム・ポールは、彼らの墓柱や、家の入口の柱や、家の内部の炉の傍の柱として伝わっている。あるいは、その理由はよくわからないが、独立して立っている。一般的にいえるのは、柱頭にはサンダーバードが巨大な翼を開けて止まり、その下に動物や人面が重なる。死んだ首長のトーテム・ポールの前で、後継者が莫大な富の贈与や食物の大盤振舞いを行う。

墓標としてのトーテム・ポールは、祖先の鳥獣の標木であるので、墓所に鳥居を立てるのと等しい。家屋の入口にこの柱があるのも当然のことである。インディアンの首長の代替わりでは、紋章の提示がなされたが、これは、自分のトーテムを示すことに外ならなかった。莫大な富が贈与されたり、返礼にそれを上回るものが返されたりするのは、墓地における交換や交易の原形である。市場の発生は墓地にある。客の目の前で、財を破壊するのは、旧と新が交替する象徴的行為である。インディアンの場合も、炉やかまどの傍の大黒柱がトーテム・ポールになっている。日本では、これにあたる柱には、ひょっとこ（火吹き男）の面や絵が掛けてある。かつて、炉の下に、祖先を埋葬した名残で、鳥こそついていないが、トーテム・ポールの1種である。豊玉姫は、海岸で出産するとき、古代のしきたりどおり、炉の傍で分娩したにちがいないが、傍の柱の先端には、鵜の羽が象徴的についていた。北米インディアンは、アジアの諸民族とは、2年以上前に分離したが、鳥杆信仰をよく保っている。

インディアンが紋章を提示する風習をもつのは、トーテムであり、守護神である祖先霊のしるしを見せることである。これは、鳥居でいえば、額にあたる。古い形式の、伊勢の神明鳥居には、額はない。本殿の床下にある心御柱が、ご神体を象徴するので、額はこの柱で代表されたと考えられる。しかし、一般に、額には神名などを記す。ユダヤ教では、個人の家あるいは教会の楣^{まぐさ}あるいは右側の柱に、羊皮紙に「申命記」の2か所の文言と、他の面にシャッダイ（古い神の名前）という文字を記した、ガラスやプラスチックの容器に入れたメズーザー^{メズーザー}というものを嵌め込む。「申命記」の文言は、6.4-9と11.13-21で、両方の文言には、神の名前を、家の入口の柱と門に書き記さねばならないといっている。ユダヤ人は、家や教会を出入りするごとに、右手の指でメズーザーをこする。ギリシア人は、家を出入りするごとに、門前に立っていたヘルメス像を手でさすった。異教時代のアラビア人は、家を出入りするたびに、門前に立っていた神像をさすった。鳥居の額は、鳥杆の先端に止まった鳥が変形したものであろう。ユダヤ教のメズーザー

は、門柱の意味であるが、門柱に渡された横木である楣^{まぐさ}に嵌め込まれたメズーザーは、鳥が最初の形であった。中国をはじめとして、楼門上の中央には、その宮殿などの名称を書いた額が掲げられている。現在では、額は単なる表札で、その他の起源は考えられないが、少なくとも、2本の柱の間にある神であったことは間違いない。B. H. チェンバレンは、『日本事物誌』2（高梨健吉訳、平凡社、1969年）の「鳥居」の項で、1868年の王政復古後に、神道の社殿の清浄化が起こったとき、政府がさいしょにしたのは、これらの額を取り除くことであった。そのとき以来、もっとも簡素な鳥居だけが建てられてきた。それだけが古式に則り、日本的であると考えられてきたからである、といっている（274頁）。清朝では、国忌として、代々の皇帝・皇后の忌辰には、太祖高皇帝以後、役所では門を閉じ、門前に机を据え、その上に、皇帝・皇后の忌辰を書いた牌を置き、諸官人は白衣を着て、終日政務をとらず、民間でも遊戯・音曲を禁じた（中川忠英著・孫伯醇、村松一弥編『清俗紀聞』1、平凡社、1966年、図1-10、1-15頁）。忌辰牌の図を見ると、茶色の屋根のついた門の扉を閉め、扉の前の机上に金色の遺牌が安置してある。周囲の壁は白色である（図の説明による）。この種の門は、役所の中では特定の門であったと考えられる。つまり、皇室だけのことに使用される門で、臣下が通行することはできなかった。門は開かずの門になっていて、平日は、皇帝・皇后の遺牌はなく、別のものを祭るか、あるいは、全く何も置かなかったと考えられる。忌辰牌の図を見ると、牌の前には、火・水・香・華その他の供物は一切ない。満族の古い伝統と思われる。

鳥杆の問題は、このほか、中国の史書に記録された、古代朝鮮の蘇塗との関連がある。その他、インドネシアの家屋の柱の先端に安置された船や、柱を上る蛇との関連の問題がある。船は太陽船として、天空をよぎり、鳥と同じような機能を果たす。これらの問題は後日、論じたい。

（1993. 9. 28 受理）